

法政大学
国際日本学研究所
シンポジウム

近世日本における 北方イメージ



2017
7/23 日 13:00~17:30 (予定)

法政大学市ヶ谷キャンパス
ボアソナードタワー25階B会議室

概要

江戸時代、蝦夷地や奥羽諸藩に対してどのような眼差しがむけられていたのだろうか。また当地に生きた人びとはそれをどのように受けとめ、自ら表象したのだろうか。近代になって東北が周縁化されていったことは知られるようになってきたが、その根は近世にはなかったのだろうか。この問題について、絵地図、狂歌、説話・小説から、多角的に探る試みである。

プログラム

- 開催趣旨 横山泰子
- 絵地図における〈北方〉へのまなざし 米家志乃布
—「みちのく」から「蝦夷地」へ—
- 規範と実感と—奥州人による奥州の狂歌 小林ふみ子
- 近世中期諸国説話集と「東国」 真島 望
- 「辺境」に生き、「辺境」を語る 伊藤龍平
—会津の奇人と近世説話
- 青森の異才が描く北方イメージ 横山泰子
—建部綾足と平尾魯仙の場合
- 総合討論

※事前申し込み不要

※本研究は平成28年度三菱財団助成金を受けて実施しています

法政大学国際日本学研究所
〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1
nihon@hosei.ac.jp

